

5. 考 察

(1) 赤色顔料について ——島根県内の墳墓における出土状況について——

古代の日本において使われた赤色顔料には、水銀朱 (HgS)、ベンガラ (Fe_2O_3)、鉛丹の3種類があるが、墳墓に赤色顔料が使用されるようになるのは縄文時代晩期末以降で、北部九州地方の甕棺墓に多く見られる。この場合使用される顔料は水銀朱が主流を占めており、ほとんどが遺骸に施されたものと推定されている。そして甕棺墓は弥生時代中期にピークを迎え、弥生時代後期終末に至って衰退に向かい、この頃から赤色顔料の主流は水銀朱からベンガラに移り、箱式石棺の棺内全面にベンガラを塗布し、床面にもベンガラが多量に散布、または敷かれている。そして水銀朱が使われる場合はごく微量が頭胸部周辺に使われているのが一般的な状況である。

島根県内において赤色顔料が出土した遺跡（墳墓に限る）を管見の限り集成したものが第5表であるが、これを見ると県内で赤色顔料が見られるようになるのは弥生時代後期終末の首長墓と見られる墳墓の主体部からであり、本田氏の論考(註1)の中で、この時期に九州以外の地域でも朱が使用されるようになるという説に合致している。

県内出土の赤色顔料については幾つか分析された例があるが、これによれば、弥生時代後期終末～古墳時代前半期までは水銀朱が多く、それ以降ベンガラが一般的に使われる状況が窺われ、古墳時代後期以降になると顔料そのものが墳墓ではあまり使用されなくなる傾向が見られる。

次に赤色顔料の使用法については、平野氏が県内の出土例をまとめておられるが、これを基に私見を加えて更に細かく分類すると、(註2)

- 1類) 主体部床面のほぼ全面に塗布する例
- 2類) 主体部床面に部分的に厚く堆積して検出された例
- 3類) 顔料が塊状となって検出された例
- 4類) 主体部床面に部分的に少量検出された例
- 5類) 顔料が土器内に残存して検出された例
- 6類) 顔料が人骨に付着して検出された例
- 7類) 棺の内側、石室壁面等に塗布された例
- 8類) その他特殊な例

がある。これを分類別に並べたものが第4表であるが、この結果注意されることは、第1類～第4類は水銀朱の場合が多く、弥生時代後期終末～古墳時代前半期の四隅突出型方形墳や前期大型古墳などの首長墓的な性格の強いものが集中し、第5類～第7類はベンガラの場合が多く、古墳時代後半期の小規模古墳や特に横穴墓に類例が集中する傾向が見られる。第8類は類例が少なく、特殊な場合であると考えられるので考察は差し控えるが、第1類～第4類と第5類～第7類の間には画期があるようであり、時代と共に使用する顔料の種類とその使用方法も変化してゆく状況が見られる。

すなわち、弥生時代後期末～古墳時代前半期にかけては、被葬者の死に際して棺内（特に棺底）を

鮮やかな赤で彩る目的（第1類、第2類）で使用されたことが考えられる。また第3類、第4類はごく微量であったり、多量でも部分的であるためにあまり視覚的な効果は期待できないものと考えられる。出土位置を見ると、棺内の中央部分または少し小口部に寄った部分に見られる場合が多い。ちょうど被葬者の頭位部分であったり、鏡や玉類、鉄器等、副葬品の置かれた重要な部位であることに注意される。すなわちこれは被葬者そのもの（特に頭胸部分）に塗布したり、塊状に副葬する意味で置かれたことが指摘されている。^(註4)ここで注意しなければならないのは、第1類では全面に赤色顔料が塗布されているために識別しかねるが、床面への塗布と同時に被葬者への塗布もあった可能性も考える必要があるという点である。

また第1類～第4類はいずれも水銀朱を使う場合が多いが、この時期に九州地方では水銀朱がしだいに使われなくなり、ベンガラに切り替わると対照的である。このことは、県内に水銀朱を墳墓で使う風習の導入が遅れることを示唆するものかもしれないが、島根県内でも、水銀朱が弥生時代後期末に墳墓に導入された後は、古墳時代前期に至るまでは首長クラスの墳墓で使用されたのち、しだいに使用される量は減少し、時代とともに省力化、簡略化して、部分的かつ効果的に使用する傾向が窺われる。

古墳時代後半になると、かなりベンガラが普及してきたように思われ、この頃から奈良時代にかけての集落跡、祭祀関連遺構、横穴墓、官衙跡、寺院跡から出土した土師器の坏類、皿類、土馬等にベンガラで塗彩されたものが多く見られるようになり、祭祀に関連して使

第4表 赤色顔料出土状況分類表

1類(主体部床面のほぼ全面に塗布する例)

No.	遺跡名	種別	時期
2	西谷3号墓	水銀朱	的場期
6	安養寺1号墓第1主体	未分析	小谷期

2類(主体部床面に部分的に厚く堆積して検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
5	宮山4号墓	ベンガラ	小谷期
7	神原神社古墳粘土床	水銀朱	小谷期
8	松本1号墳第1主体	水銀朱	小谷期
13	小屋谷3号墳第1主体	ベンガラ	小谷期

3類(顔料が塊状となって検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
6	安養寺1号墓第2主体	未分析	小谷期
16	中山2号墳	水銀朱	山本II期

4類(主体部床面に部分的に少量検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
8	松本1号墳第2主体	水銀朱	小谷期
9	金代1号墳第2主体	水銀朱・ベンガラ	小谷期
10	斐伊中山2号墳第4主体	水銀朱	小谷期
11	斐伊中山14号墳	水銀朱	小谷期
17	道仙3号墳	未分析	不明
18	道仙5号墳	未分析	不明
29	弥陀原4号穴	ベンガラ	山本III期

5類(顔料が土器内に残存して検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
7	神原神社古墳埋納壙	水銀朱?	小谷期
24	稗田所在古墳	未分析	不明
26	二子塚古墳	ベンガラ	山本II期
27	奥山B-1号横穴	ベンガラ	山本IV期
28	高津久横穴	ベンガラ	不明
29	弥陀原4号穴	ベンガラ	山本III期

6類(顔料が人骨に付着して検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
19	毘売塚古墳	未分析	古墳時代中期
25	川子谷B-1号墳	水銀朱	不明
30	黒鳥2号穴	ベンガラ	山本IV期

7類(棺の内側、石室壁面に塗布された例)

No.	遺跡名	種別	時期
1	順庵原1号墳	未分析	的場期
7	神原神社古墳石室壁面	水銀朱?	小谷期
19	毘売塚古墳	未分析	古墳時代中期
20	仲仙寺1号墳	未分析	古墳時代後期
21	仏山古墳	未分析	古墳時代後期
22	谷山古墳	未分析	不明
23	西万田峴神社境内古墳	未分析	不明
31	矢田II群1号横穴	未分析	古墳時代後期
32	東光台横穴	未分析	古墳時代後期

8類(その他特殊な例)

No.	遺跡名	種別	時期
15	奥才34号墳	ベンガラ・水銀朱	不明

用されたものと考えられている。ベンガラの普及により赤色顔料は一般の人々にはより身近な彩色用として利用されたようである。一方水銀朱はこの頃から墳墓出土例はほとんど見られなくなり、古墳の主体部において赤色顔料を使用する場合にはベンガラを一般的に使う傾向が見られる。

すなわち、第5類の場合は特に横穴墓から検出された壺類の内面に顔料の付着が見られる場合で、顔料そのものを副葬したり、何らかの祭儀に使用した残りを納めたものと考えられるが、この場合、現時点までの調査例ではベンガラ4例、水銀朱1例、不明1例となっており、ベンガラが圧倒的に多い。水銀朱と思われる例は神原神社古墳（No.7）埋納壙出土の壺内に納められたものであるが、これは古墳時代前期の事例であるので除外して考えると、古墳時代後半期では顔料の副葬に際してはベンガラを一般的に使用する傾向が認められる。

第6類は顔料が人骨に付着して検出された例である。人骨自体の遺存例が少ないので事例は少ないが、分析の結果判明しているのは水銀朱1例、ベンガラ1例である。また毘売塚古墳（No.19）は分析されていないが調査時の観察の中で、^(註5)棺内に丹、人骨に朱、というように書き分けられており、棺内にはベンガラ、人骨にはより鮮やかな水銀朱が塗されていた可能性も考えられる。また、第6類の使用法で注意されることとしては、先葬者に対する塗布であるという点である。川子谷B-1号墳の場合は女性の頭骨顔面部及び頭骨推定原位置に水銀朱が認められ、黒鳥2号横穴墓の場合は1号人骨（性別不明）の頭蓋冠、上顎骨前面、上顎歯、下顎歯の外側面に点状～斑状に付着していた。この2例はいずれも初葬の被葬者に対する塗布で、しかも白骨化した後に塗布されていることが特徴的で、^(註6)後葬者埋葬時における先葬者に対する儀式であるとの指摘がされている。また、毘売塚古墳の場合は、舟形石棺の中に1体の人骨が残存しており、頭部に顔料が付着していた事例である。この場合には初めから追葬は予定されていなかったが、埋葬時に被葬者の顔面に塗布されたことが考えられ、先の2例と比べて塗布する位置は同じであるものの、使用方法には相違が見られ、先に第4類の事例で述べた被葬者の頭位部分に顔料の残存が見られるものと同様に捉えられるのではないだろうか。

第7類は棺の内側や石室の壁面に塗布された例である。弥生時代後期の順庵原1号墳や古墳時代前期の神原神社古墳にも例があるが、特に古墳時代後半期に安来市内の古墳や横穴墓の石棺に顕著に見られ、地域的な風習としても捉えられる可能性がある。分析された例はない（神原神社古墳の場合は粘土床検出資料のみ分析されているため不明であるが、同じ顔料を使ったものとすれば水銀朱となる）が、顔料を多量に必要とするため、入手しやすいベンガラが使われた可能性が強いものと考えられる。

以上分類したものを整理すると、大まかには装飾的な使用法（第1, 2, 7類）、副葬品的な使用法（第3, 5類）、祭儀的な使用法（第4, 6類）の3区分に大別される。これに時代的な流れを加味すると、弥生時代後期～古墳時代前半期に主体部棺底を水銀朱で鮮やかに彩る第1類、若干省略化の見られる第2類は古墳時代後半期に石棺の内面を彩る第7類へと継承され、塊状に顔料を副葬した第3類は横穴墓に見られるような壺類に納めて副葬する第5類へ、被葬者の頭～胸部に塗布された第4類は第6類へとつながる3つの大きな流れがあり、また弥生時代後期～古墳時代前半期には水銀朱が多用され、後半期以降は顔料そのものが墳墓において使用されることが少なくなる中でベンガラに主流が移り変わる傾向が見られる。

本墳の場合は第4類に属するが、鏡に付着していたベンガラと、床面からは微量の水銀朱に混じって極微量のベンガラの小塊が検出されている。^(註8)両者が同時に検出された例は他に第8類の奥才34号墳の例がある。本例の場合は土壤に納めた土師器甕内に礫が詰められ、その上層の礫からベンガラと微量の水銀朱が検出されている。これは埋葬主体とは考え難く、どのような施設で、どのように使用されたかは不明であるが、二種類の顔料を使っている点で貴重な事例である。また、毘売塚古墳の事例が先に述べたように被葬者の頭位に水銀朱、石棺内面にベンガラが使われていたのならば、祭儀的行為に水銀朱、装飾的行為にベンガラ、というような使い分けの意識が想定される。本墳の場合には、鏡背部はベンガラで塗彩され（鏡背部をどの時点で塗彩したかは不明）、更に被葬者の頭位が斐伊中山2号墳の例のように鏡付近にあったとするならば、被葬者の頭胸部には水銀朱が塗布されたと考えられ、両者の顔料が棺底に混在して遺存したものと推定され、祭儀的行為に水銀朱、装飾的行為にベンガラというように、ここでも顔料の使い分けが想定されるのではないだろうか。

一方、赤色顔料を土器に塗彩する例は、県下では縄文時代後期から見られ（第6表）、五明田遺跡から出土した浅鉢や深鉢の外面縄文帯に塗彩された例をはじめ、^(註9)弥生時代では布田遺跡から出土した中期の壺形土器の口縁部または頸部外面文様帯に塗彩する例や、^(註10)西谷3号墓第1主体部直上供献土器に塗彩されたものが見られるよう^(註11)に墳墓の供献土器に塗布される例、そして古墳時代後期～奈良時代にかけての壺、皿類に顕著に見られる赤色塗彩例など、墳墓の主体部中に顔料が導入される以前から既に使用が始まり、以後継続する状況が窺われる。これらの中で分析された例をあげると、布田例はベンガラ、西谷例では水銀朱が検出され、古墳時代後期～奈良時代にかけての壺、皿、土馬からはいずれもベンガラが検出されている。また土器以外の器物については、タテチョウ遺跡から出土した^(註12)弥生時代中期の櫛には赤漆の塗彩が見られ、分析の結果、水銀朱が検出されている。数少ない分析例から言及できることは少ないが、現時点で言えることは、遅くとも弥生時代中期には水銀朱とベンガラの両者は存在し、使用されたが、古墳時代後半期に至ってはほぼベンガラ一辺倒の使用となり、墳墓における場合と同じ状況を示す。そこには両者を祭儀用と装飾用に使い分ける意識が存在していて、やがて時期が下ると共にその意識が薄れて行くことも推定されるが、現時点では確証に乏しく、また水銀朱とベンガラの物量的な側面と入手の易難も考え併せる必要があるものと思われる所以、今後更に検討を要する課題としておきたい。

註1) 本田光子・成瀬正和「亀山古墳出土の赤色顔料について」（志免町埋蔵文化財調査報告書第5集）1993年

註2) 註1)同じ

註3) 平野芳英「島根の考古学と自然科学—1—」（島根県八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅱ）1990年

註4) 斐伊中山2号墳第4主体部床面の土壤分析により、リン分検出範囲と、鏡、顔料遺存位置との照合により、鏡と顔料の位置に被葬者の頭～胸部があったものと推定されている。杉原清一「床土の化学分析による遺体位置の特定」（八雲立つ風土記の丘館報No117、1993年）及び「斐伊中山古墳群」（木次町教育委員会、1993年）

註5) 山本清「山陰古墳文化の研究、第2章山陰の石棺について、94頁」1971年

註6) 上田健夫「付編Ⅱ；島根県加茂町川子谷B-1号墳出土の朱色顔料」（神原地区遺跡分布調査報告1988年）

ほか註3)にも同じ

- 註7) 先に述べたように第1, 2類中には、被葬者へ塗布した場合もあり得ることで、この場合には装飾的な側面と、祭儀的な側面を併せ持つことになる。
- 註8) 本田光子・成瀬正和両氏の鑑定結果による。
- 註9) 柳浦俊一氏の教示による。「五明田遺跡」(頃原町教育委員会) 1991年
- 註10) 永嶋正春「布田遺跡出土漆塗土器、赤彩土器の塗装技術について」(一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ、布田遺跡) (島根県教育委員会) 1991年
- 註11) 渡辺貞幸・田中義昭「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」(島根大学法文学部考古学研究室) 1992年
- 註12) 永嶋正春「タテチョウ遺跡出土の赤色漆塗櫛に見られる漆技術について」(朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ) 1990年

第5表 島根県内赤色顔料出土遺跡一覧表

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
1	順庵原1号墳 (邑智郡瑞穂町)	四隅突出型墳丘墓 (10.8×8.3m) 墳頂部に3基の主体部 (第1主体) 箱式石棺内側に多量の丹痕 (第2主体) 箱式石棺内側に少量の丹痕	未分析	(第1主体墓域内) ガラス小玉14個 (第2主体墓域内) ガラス小玉49個 ガラス製管玉3個
2	西谷3号墓 (出雲市大津町)	四隅突出型墳丘墓 (50×40m) 墳頂部に8基の主体部 (第1主体) 箱式木棺底全面, 厚さ3~4cm 落込土底の円礫に付着 主体部直上供獻土器中に塗彩されたものあり (第3主体) 箱式木棺底全面, 厚さ最大3cm	水銀朱 X線回析法と 蛍光X線分析 (1988)	(第1主体棺内) 大形管玉22(ガラス) 小形管玉30(緑色凝灰岩) 〃 4(ガラス) 小玉 170(ガラス) (第1主体部直上供獻土器) 壺24, 裝飾壺3, 器台8, 低脚壺19, 把手 付短頸壺13, 鼓形器台24, 高壺9 (第3主体) 遺物なし
3	仲仙寺9号墓 (安来市西赤江町)	四隅突出型墳丘墓 (27×22.5m) 墳頂部に3基の主体部 (中央主体) 箱式木棺底に赤色顔料が残存 (範囲不明)	未分析	(中央主体内) 碧玉製管玉11 (主体部直上) 壺, 壺, 器台, 高壺
4	仲仙寺10号墓 (安来市西赤江町)	四隅突出型墳丘墓 (推定約25m) 墳頂部に11基の主体部 その内木棺底に赤色顔料の残るものがあった	未分析	中央大形壺2基に碧玉製管玉9+19個 主体部直上に壺, 壺, 器台, 高壺, 低脚壺
5	宮山4号墓 (安来市西赤江町)	四隅突出型墳丘墓 (28.8×24.6m) 墳頂部に主体部1基 箱式木棺床面に多量に堆積(詳細不明)	ベンガラ 発光分光分析 (1983)	(棺内) 太刀1
6	安養寺1号墳 (安来市西赤江町)	四隅突出型墳丘墓 (20×16m) 墳頂部に4基の主体部 (第1主体) 箱式木棺床面全面に残存 (第2主体) 箱式木棺北端部に塊状に残存	未分析	(棺内) 出土遺物なし (第1主体上面) 器台2, 壺1, 高壺9, 低脚壺2, 石棒1 (第2主体上面) 器台1, 注口土器1, 高壺2 標石1
7	神原神社古墳 (大原郡加茂町)	方墳 (30×25m) 竪穴式石室1基(U字形粘土床) 床面中央部, 鉄鎌矢羽部に残存, 埋納壙土器内に塊状に残存 石室壁面の板状割石小口部に付着	水銀朱 X線回析法と 蛍光X線分析 (1988)	(棺内) 三角縁神獣鏡1, 素環頭太刀1, 太刀1, 剣1, 鐵鎌36, 鎌先1, 鎌1, ナタ状鉄器1, 鋏1, 鋸2, 鍛針2 (埋納壙中) 壺2, 壺3 (石室蓋石上) 壺5個体以上, 円筒形土器7 個体以上
8	松本1号墳 (飯石郡三刀屋町)	前方後方墳 (全長50m) 墳頂部に2基の主体部 (第1主体) 箱式木棺(粘土床)床面中央部の 2.6mの範囲に堆積 (第2主体) 割竹形木棺(粘土櫛)床面中央部 2箇所に残存	水銀朱 湿式定性分析 (1963)	(第1主体棺内) 斜縁神獣鏡1, 刀子3, 小形劍形鉄器1, 鍛針7, ガラス小玉54 (第2主体棺内) 鐵劍1, 碧玉製管玉, 鉄器小片
9	釜代1号墳 (松江市西浜佐陀町)	楕円形墳 (20×16m) 墳頂部に2基の主体部 (第2主体) 割竹形木棺(粘土櫛)床面2箇所 に残存 (床面中央部) ベンガラ, 水銀朱若干 (床面東端部) ベンガラ若干	ベンガラ及び 水銀朱 X線回析法と 蛍光X線分析 (1994)	(第1主体直上) 鼓形器台2, 高壺6, 小形 丸底壺1, 直口壺2 (第2主体棺内) 內行花文鏡1, 勾玉1, ガラス小玉67, 木片
10	斐伊中山2号墳 (大原郡加茂町)	丘陵尾根を加工して15×12mの平坦面 を造る, 墳頂部に6基の主体部 (第4主体部) 割竹形木棺(粘土櫛)床面の中 央部(副葬品位置)に残存	水銀朱 X線回析法と 蛍光X線分析 (1993)	(棺内) やりがんな1, 刀子1, 細線式鳥獣鏡1
11	斐伊中山14号墳 (大原郡加茂町)	丘陵尾根を加工して4.5×6.2mの平坦 面を造る, 1基の主体部 箱式木棺底, 20×30cmの範囲で1箇所 に残存	水銀朱 X線回析法と 蛍光X線分析 (1993)	(棺内) やりがんな1

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
12	神原正面北E-5号墳 (大原郡加茂町)	方墳(規模不明) 墳頂部に6基の主体部 (中柱体) 箱式木棺床面に残存(範囲不明)	未分析	(中央主体棺内) 剣1 (主体部直上) 高坏, 低脚坏, 他
13	小屋谷3号墳 (八束郡八雲村)	長方形墳(19×15m) 墳頂部に2基の主体部 (第1主体) 床面頭位部分25×33cmの範囲に 残存, 厚さ最大1cm	ベンガラ 発光分光分析 (1983)	(第1主体棺内) 刀, 木片, 四子文鏡1
14	奥才14号墳 (八束郡鹿島町)	円墳(径16m) 墳頂部に2基の箱式石棺 (第1主体) 棺内出土内行花文鏡の鏡背部に 付着	未分析	(第1主体棺内) 内行花文鏡1, 方格文鏡1, 碧玉製紡錘形石製品1, (第1主体棺外) 素環頭太刀1, 鐵槍1, 鐵劍2, やりがんな2, 刀子1, 不明鉄器4 (第2主体棺内) 鐵劍1, 鐵鎌1, 刀子1
15	奥才34号墳 (八束郡鹿島町)	方墳状の墳丘(11×8m) 0.8×0.6mの隅丸方形土壙に土師器壺 を据え, 小形壺で蓋をする, 内部に礫 が充満していた 壺内上部の礫にはベンガラが付着し, さらに微量の水銀朱が検出された	ベンガラ及び 水銀朱 ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1986)	(壺内) 碧玉製石鉗1, 振文鏡1, 碧玉製勾玉1, 環形製勾玉1
16	中山2号墳 (八束郡八雲村)	方墳(13×9.5m) 墳頂部に2基の主体部 2基の主体部の中央部(第3主体推定地)に塊状 に残存	水銀朱 発光分光分析 (1983)	朱と共に鉄鎌5 (第1主体) 須恵器壺3組, 手づくね土器1 (第2主体) 刀子, 須恵器小形壺1
17	道仙3号墳 (松江市下東川津町)	方墳(10×9.6m) 墳頂部に木棺1, 壺棺2 箱式木棺床面の20×20cmの範囲に残存	未分析	(木棺内) 鐵鎌1
18	道仙5号墳 (松江市下東川津町)	方墳(一辺16m) 墳頂部に主体部1基 主体部床面に少量残存	未分析	出土遺物なし
19	毘壳塚古墳 (安来市黒井田町)	前方後円墳(全長約50m) 後円部に舟形石棺1 棺身内面に丹, 人骨頭部に朱が付着	未分析	(棺内) 金銅製空玉3?, 鐵劍2以上, (棺外) 鐵矛1, 鐵鎌3以上
20	仲仙寺1号墳 (安来市西赤江町)	円墳(径15.9m) 墳頂部に箱式石棺1, 壺棺1 石棺内側及び蓋石裏面に丹痕	未分析	(棺内) 鐵片 (外部) 土師器大形壺形土器底部, 須恵器壺片 円筒埴輪片
21	仏山古墳 (安来市荒島町)	円墳 墳頂部に箱式石棺1基 箱式石棺内部に塗彩	未分析	(棺内) 環頭太刀, 刀身, 櫓身, 斧, 金銅張鉄 製杏葉, 裂珠残欠2, 鐵鎌27, 嵌残 欠2, 鐵1, 胃1, 鏡1, 勾玉1
22	谷山古墳 (安来市安来町)	墳形不明 舟形石棺?蓋石内面に付着	未分析	出土遺物不明
23	西万田峴神社境内 古墳 (平田市万田町)	円墳 石棺蓋内面に塗彩	未分析	劍
24	稗田所在古墳 (隠岐郡布施村)	前方後円墳、石室あり 椀内に残存	未分析	
25	川子谷B-1号墳 (大原郡加茂町)	方墳(9.8×7.3m) 墳頂部に主体部1基 箱式石棺内に人骨2体分 1号人(後葬:♂), 2号人(先葬:♀) 2号人♀の頭骨顔面部分及び頭位推定 原位置床面に残存, 白骨化後に塗布	水銀朱 X線回析法と 蛍光X線分析 (1993)	出土遺物なし
26	二子塚古墳 (松江市上乃木)	方墳(一辺18m) 主体部形状不明, 墳丘基盤上検出の土師器椀底内面に残存	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1986)	(主体部?) 短刀1, 鐵鎌2, (周溝中及び墳丘表面) 円筒埴輪, 壺坏1, 須恵器器台1, 須恵器小壺1, 須恵器壺片

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
27	奥山B-1号横穴 (松江市浜乃木)	四注式家形平入(玄室2.2×2.4m) 人骨3体(性別不明、内1体は幼児) 墓道周辺から出土した蓋壺内側に痕跡として残存	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1986)	(玄室内外) 碧玉製管玉1、刀子2、長頸壺3 平瓶1、蓋壺類17、扁1、高壺2、短頸壺1
28	高津久横穴 (隱岐郡海士町)	須恵器内に残存	ベンガラ 発光分光分析 (1983)	
29	弥陀原4号穴 (松江市乃白町)	便化家形妻入(玄室2.8×2.7m) 玄室床面3箇所に少量残存 玄室内須恵器壺蓋内に塊状に残存	ベンガラ 発光分光分析 (1983)	(玄室内) 直刀1、壺蓋16、壺身18、高壺5、扁2、壺1、短頸壺1、壺1、土師器壺1、提瓶3、鐵鑑12、刀子1、耳環1
30	黒鳥2号穴 (安来市黒井田町)	四注式系三角形断面平入(玄室1.6×2.4m)、3体の人骨と乳児の歯 1号人(?)、2号人(♂)、3号人(♀) 1号人頭蓋骨及び上下顎歯の外面に点状～斑状に付着、白骨化後に塗布	ベンガラ 低真空反射電子モード走査型電子顕微鏡で観察 (1983)	(玄室内) 壺蓋3組、高壺1、短頸壺1、平瓶1、刀子2、鐵鑑2、太刀1、鐵片1 (墓道及び前庭部) 横瓶1、高壺、壺蓋1、壺身2、大小壺片
31	矢田II群1号横穴 (安来市矢田町)	丸形天井(玄室3.8×2.7m) 横口式家形石棺1、屍床1 石棺内外面に丹彩の痕跡	未分析	(玄室) 鐵鑑1、刀子1、鋸1、壺蓋1、壺身1、 (前庭) 壺蓋1、壺身2、高壺1、埴輪円筒残欠1個体分
32	東光台横穴 (松江市東津田町)	四注式平入(玄室2.25×2.0m) 組合式箱式石棺の壁板2枚の内側に付着	未分析	出土遺物不明

第6表 島根県内赤色塗彩遺物出土遺跡一覧表

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
1	五明田遺跡 (飯石郡頓原町)	縄文時代後期の河岸段丘上の集落跡 溝状遺構1、貯蔵穴状土壙7 深鉢、浅鉢合計17片の外側縄文帯に付着	未分析	浅鉢、深鉢、壺形土器等の精製有文土器、粗製無文土器、石器(石斧、石棒、石鎌、石匙、石錘、叩石、剥片他)
2	布田遺跡 (松江市竹矢町)	弥生前期後半～中世の複合遺跡 弥生時代旧河道第2層中から検出された弥生中期の壺片4片の口縁部または頸部外側文様帯に付着	ベンガラ X線回析法と 蛍光X線分析 (1991)	縄文土器(浅鉢、深鉢)、弥生土器(壺、蓋、鉢、高壺、漆塗土器他)、土師器(壺、蓋、器台他)、須恵器、陶磁器類、土製品(分鉢形土製品、銅鐸形土製品他)、石器、木製品
3	タテチョウ遺跡 (松江市西川津町)	縄文時代～中世の複合遺跡 弥生中期の櫛17点に朱漆で塗彩	水銀朱 蛍光X線分析 (1990)	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器類、石器、木器、漆器他
4	西谷3号墓 (出雲市大津町)	四隅突出形墳丘墓(50×40m) 第1主体部直上供獻土器中の壺類、高壺、器台、低脚壺に塗彩されたものあり	水銀朱 橋谷博氏鑑定 (1992)	(第1主体棺内) ガラス製管玉、緑色凝灰岩製管玉、ガラス製小玉
5	石屋古墳 (松江市東津田町)	方墳(一边40m) 主体部未調査 墳裾造出部から検出された形象埴輪片に赤色と緑色の顔料が塗彩されていた	(赤)ベンガラ (緑)岩綠青 ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1990)	(埴輪) 円筒埴輪、形象埴輪、須恵器壺、須恵器器台、土師器高壺、土師器壺
6	十王面横穴群 (松江市矢田町)	4号穴前庭部出土の土師器皿底部片外側に塗彩されていた、合計3個体分	未分析	(玄室内) 鐵釘約25、丸彫り人物像1、 (前庭部) 壺蓋類19、高壺1、横瓶1、長頸壺2、短頸壺2
7	池ノ奥2号墳 (松江市大井町)	山寄せの円墳(径9m) 横穴式石室1基、周溝中に円筒棺1 石室羨道部出土の壺片に付着して残存	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1990)	(玄室内) 壺蓋5、壺身5、壺片他 (羨道部) 小形壺、壺片他

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
8	池ノ奥窯跡群 (松江市大井町)	南向きの斜面に須恵器窯3基 3号土壙(3.7×7.2m)中須恵器群に混じって塗彩された土師質土馬が2体	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1990)	(土壙中) 蓋坏類37, 高坏4, 蓋4, 低脚坏2, 盒1, 台付壺1, 長頸壺1, 壁1, 盒1, 瓷体若干
9	池ノ奥A遺跡 (松江市大井町)	南向き斜面の住居跡, 祭祀関連遺構 土壙3, 土器群2, 焼土遺構他 土器群から検出された50片以上の盤, 坏身片(7c末~8c末)に塗彩されていた	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1990)	(須恵器) 蓋坏, 蓋, 壺, 円面鏡 (土師器) 壺, 瓷, 盒, 支脚, 手づくね土器 (その他) 土玉, 須恵器質支脚
10	イガラビ遺跡 (松江市大井町)	山裾及び谷間の祭祀跡または土師器生産地, 掘立柱建物跡1棟, ピット多数 円形焼土壙11基他 C-3, D-3区土器溜り中, SB-01のピット中, SD-01, 02中から検出された57点以上(8c後半~9c)の土師器片に塗彩されていた, 器種は坏, 盒類, 高坏, 壺, 鍋	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1990)	(須恵器) 蓋坏, 壺, 高坏, 増, 横瓶他 (土師器) 壺, 瓷, 坏, 支脚他 (その他) 土馬5体以上, ミニチュア支脚1, 土鍤32, 円面鏡1, 灯明皿2
11	高広遺跡 (安来市黒井田町)	横穴墓13穴, 竪穴住居跡1棟, 掘立柱建物跡延べ63棟 W-2号穴前庭部出土皿, SB-20, 27, 28出土皿, 高台付坏, 壺胴部破片に塗彩されたものあり(いずれも奈良時代)	未分析	縄文時代~平安時代にかけての土器類, 石器, 土製品, 鉄器, 金銀装飾太刀, 他
12	菅沢谷横穴群 (松江市乃白町)	横穴墓13穴 A-3号横穴墓玄室内出土高坏, 脚付短頸壺に塗彩されていた	未分析	(A-3号玄室内) 坏蓋2, 坏身2, 高坏2, 脚付短頸壺1
13	堤廻遺跡 (松江市西川津町)	集落跡, 竪穴住居跡21棟, 掘立柱建物跡2棟 SI-01出土長頸壺の体部外面頸~口縁部にかけての内外面に塗彩 同出土高坏の脚部外面及び坏部内外面に塗彩されていた	未分析	(SI-01) 坏蓋1, 壁1, 土師器壺片1
14	四王寺跡 (松江市山代町)	寺院跡 均整唐草文軒平瓦下面部に付着	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1988)	軒丸瓦, 軒平瓦, 須恵器, 土師器, 陶磁器類, 煙突
15	史跡出雲国府跡 (松江市大草町)	国衙跡 昭和45~47年の発掘調査で後殿, 後方宮衙, 大溝, 柵列, 井戸等が検出され 坏蓋, 坏身, 盤等, 合計13個に塗彩されたものが見られた	未分析	須恵器, 土師器, 瓦, 木簡, 銅印, 鏡, 土鍤, 羽口, 碧玉, 水晶, めのうの剥片, 原石等
16	芝原遺跡 (松江市福原町)	島根郡家推定地 SX-01出土の土師器坏, 皿に丹塗りのものがあった	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 検出試薬による微量化学分析 (1988)	墨書き土器, 製塙土器, 須恵器, 土師器, 木器, 陶磁器類, 石器